

西北岸一帯の水面に、およそ幅 200 m、長さ 2000 m にわたって、オニビシやヒメビシと共にヒナウキクサが生育しているのを発見した。このように、ヒナウキクサが広範囲の水域に分布するのを観察できたのは、筆者にとって初めてのことでここに発表する。(1981. 10. 15 記)

(付) ヒナウキクサの学名について :

ヒナウキクサの学名を *Lemna minima* Phil. とし、北米からの外来種として、三木茂は山城水草誌 (1936, 昭和 11 年) に発表したのが、わが国における最初であり、この野生状態を最初に発表したのは松山庫三 (武蔵野の植物 p.133, 1965) である。松山は東京の吉祥寺市にある井の頭公園の池で観察して、*L. minima* Phil. として報告、その後、筆者その他いく人かの発表者がいるが、学名はいずれも *L. minima* Phil. と発表して現在に至っている。

しかしながら、1980 年 9 月になって、最も信頼性の高い外国の文献に接する機会が得られ、この文献 (A MONOGRAPH OF LEMNACEAE; DEWIN HORACE DAUBS p.28-32, p.74~79, 1965) によると、ヒナウキクサの学名として使用してきた *L. minima* Phil.

は、今後、*L. valdiviana* Phil. と修正せざるをえないことが明らかになったので、ここに発表する。

上記の文献によると、ヒナウキクサの分布は南北アメリカにのみ分布することが記されているが、日本をはじめ、今後は他の諸国にもしだいに分布するにちがいないと考えられる。

なお、筆者がチリウキクサの学名を *L. valdiviana* Phil. として発表 (日本水生植物図鑑 p.137) しているのは、明らかに誤謬であることを申しあげる。私の命名したチリウキクサに該当する植物は上記の文献によると *Lemna minor* L. である。

しかし、最近、E. Landolt 博士によると極東に分布する従来 *L. minor* と呼ばれていた植物は *L. japonica* Landolt (新種) と学名が変更された。これについては更に検討する必要がある。

ご承知のように、*Lemna* 属の葉状体は微小な上に成長の時期や栄養状態によっても、外形にいろいろ変異がみられるので識別が困難な仲間であり、会員諸氏にも今後、大いに注意して研究してもらいたい水草である。

なお、1980 年 5 月に会員の大野景德先生から送られたウキクサの生品は、その後の観察でヒナウキクサであっ

たことを付記する。

最後になったが、ヒナウキクサの学名の改訂に際し、文献その他のご指導を頂いた京都大学農学部の別府敏夫博士に深甚の謝意を申しあげる。

—以上—

兵庫県にもあるヒナウキクサ

角野康郎

兵庫県にもヒナウキクサの産地がある 既刊の図鑑類や『兵庫県植物目録』(1971)には出ていないので報告しておく。場所は明石市大久保町のため池。トチカガミやオニビシの繁茂する富栄養化した池の一角に、ウキクサと混って元気に生育している。冬になると多くの水鳥たちがこの池を訪れる。この池にだけヒナウキクサが分布する理由は、この水鳥たちに求められるかもしれない。なお、ヒナウキクサの同定は京大の別府敏夫氏に確認していただいた。

ムサシモ下総印旛沼畔に多産す

斉藤吉永

干拓で相当の広さを埋立てたといっても印旛沼はまだ千葉県下で一番大きいことには変りがない。かって大滝末男氏が 1972 の夏期の調査では印旛沼 (北部調整池) の透明度は 50—80 cm であったというのに 1981 では 20 cm 程の水中のササバモが見える程度に汚れている。幾回かガシャモクを尋ねても皆目見当がつかなくてまよと漁業協同組合の経営している成田市の水神の森 (佐倉宗吾で有名な舟守の甚兵衛の伝説の地) を背景とした養魚池で見事に開花したアサザの写真を撮っていると隣の池では水草を除去しているのに気付いて近寄って見ると約 800 m² にびっしり生えたトリゲモかホッスモらしいものを盛んに土手にはうりあげていた。

標本用に少量を貰って帰宅後ルーペで調べて見ると、なんとこれはムサシモ *Najas ancistrocarpa* A. Br. であった。別名マガリミイバラモと呼ばれるように果実が曲っているので区別はついたがあまり注意していなかったためにムサシモの存在を気付かなかったわけである。

千葉県植物誌 (新版) にもムサシモはリストから欠除されている。

養魚池で邪魔者扱いをされているムサシモが根こそぎ除去はされまいから当分は生存してくれるであろう。一応多産を報告しておきたい。(1981・9・20)

人で本会会員でもある野口達也氏らによって水草も精力的に採集されており、いろいろ参考になるものとなっている。(角野康郎)

書評

田高昭二著「小川原湖の自然」(東奥日報社刊, 昭和53年10月, 329p, 1,100円)

小川原湖の生いたちに始まって、湖岸及び湖中の生物たちが紹介されている。この種の本には歳時記風に植物を紹介して終わるものが多いが、この本は、著者の長年にわたる研究に裏付けられた立派な自然誌である。

。「霞ヶ浦の生物」(建設省関東地方建設局霞ヶ浦工事事務所発行, 昭和55年3月, 174P, 非売品)

霞ヶ浦の生物がプランクトン、底生生物、水生植物、魚類、鳥類に分けて紹介されている。水生植物は信州大学の桜井善雄助教授が担当されている。第2章「概要」では水生植物のはたらきや、湖水の汚濁による最近の変化などが概説され、第3章「霞ヶ浦の生物」では63種(湿生植物含む)が簡単な解説とともに挙げられている。そして、その全ての種について、実に美しいカラー写真が載せられている。なお、この写真中、「25-a ヒルムシロ」はササバモの浮葉型、「45-a, b ササエビモ」はオオササエビモではないかと思う。

。鈴木昌友, 他7名著「茨城県植物誌」(茨城県植物誌刊行会, 1981年9月, 339P)

関東地方北部から東北地方南部にかけては、水草の植物地理を考える上で重要な地域である。その意味でも、茨城県できわめて内容のしっかりした植物誌が出たことは喜ばしい。前半で地域ごとにフローラを概観し、後半がシダ類以上の植物リストになっている。植物の産地は、メモや記憶によってではなく標本によって記録されているので(これは今では常識とならねばならないことだが)、今後、研究を進めてゆこうとする者は大変助かる(標本がなければ疑問が生じたとき調べようがないし、引用したくとも引用できない)。

現在、各地で出ている植物誌の類はかなりの数にのぼるが、水草に関する限り、調査が不十分であったり、同定が不正確であったりして得心のゆかないものが多い。しかし、「茨城県植物誌」の完成にあたっては、著者の一

訃報 英 清道氏(東京都)

昭和56年10月21日、心不全にて急逝されました。享年51歳。ここに謹んで御冥福をお祈りします。

故人は、北里研究所附属東洋医学総合研究所基礎研究部長(医博)の要職にあられ、水草や食虫植物をライフワークとして御活躍でしたがまことに残念、哀惜の限りでございます。 会 長

【編集後記】

いよいよ年の瀬も押し寄せまってきました。水草研究会の方は、目標どおり年4回発行が果たせました。これも会員皆様方の協力のお陰と感謝しています。今年の編集のことをふりかえってみますと、毎回、予定よりも遅れ気味に作業が進んだため、ゆっくり時間をかけることができず、いくつも心残りになったことがあります。しかし、総合的評価(?)をすれば、1年あまりでここまで来れたのだから良しとしようという実感です。

来年度は、予算の許す範囲で増ページも考え、内容の充実をはかってゆきたいと思いますので、積極的な御投稿をお待ちします。なお、余裕をもって編集を進めるため原稿締切日を、少し早くさせていただきます。

原稿の送り先 〒657 神戸市灘区鶴甲1-2-1
神戸大学教養部 角野康郎宛

No.7 発行予定 3月(原稿締切1月31日)

【No.5 訂正】

P1左8行目 Lamarackiana→Lamarckiana
P2左1 " 清原 全→清原 金
P13右6 " Imhori→Imahori

水草研究会会報 No.6 (1981年12月)

(Bulletin of Water Plant Society, Japan)
発行 水草研究会(〒123 東京都足立区梅田3-26-28 大滝末男気付)

印刷 中村印刷株式会社(神戸市灘区友田町3-2-3)